角川文庫
—713—

若草

福田清人

角川書店

昭和二十八年十月十五日　初版発行
昭和三十六年十一月十五日　十五版発行
昭和四十五年八月三十日　改版再版発行

定価は、帯、カバーに明記してあります

著作者　福田清人

発行者　角川源義

印刷者　和田彰三
東京都板橋区小豆沢一ノ四ノ二六

発行所　株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二ノ十三
〒一〇二　東京一九五二〇八
電話東京(265)七二一(大代表)

落丁・乱丁本はお取替えいたします

Printed in Japan　印刷・製本　東洋印刷

庫
文
川
角
草
若

若　　草

福田清人

713

本書は、著者の了解を得て、現代表記法により、原文を新字・新かなづかいにしたほか、漢字の一部をひらがなに改めた。

（編集部）

一

東京の空を這う闇が、ますます濃くなるにしたがって、ネオン・サインにいろどられた銀座の宵はいよいよいきいきとしてきた。街のすみずみから、いつの間にあらわれたか、夜店商人は、縄張りの場銭をとる「街の親分」のすばやい指図にしたがって、鋪道のかたわら、すでに柔らかな芽をふくらませた柳の樹の下に、一夜の店を開きはじめた。省線電車の定期券をさえもって、板橋の方からそこを職場に通ってくる乞食の老婆は、どこの安楽な隠居かと、電車のなかでは思われたきちんとした服装を、ガード下の闇にまぎれて、大きな風呂敷につつんできた「労働服」ともいうべき襤褸に着かえ、足どりさえ今までとかわったよろよろした調子で、数寄屋橋の上までくると、ペタリとすわり、習慣のため機械的になった頭を上下する運動で、通行人に銭を乞うのであった。街角のビーヤ・ホールの裏口には、ビール樽を満載したトラックが幾台も横づけになり、裏街の酒場、カフェーには、濃い白粉、口紅の女たちの眼がギラギラ輝いていた。

そうした銀座の表通り、すでに閉ざされた百貨店の横手に三、四人の青年が、絵筆を片手に、流れてゆく通行人に客を物色していた。茫々とのびた髪、ネクタイをしめぬワイシャツ、よごれたコールテンの服——街頭の芸術家、似顔絵かきの青年たちだった。彼らのかたわらには、シンプソン夫人からヒットラー、蔣介石、新しい首相と国際関係や政界の話題の主人公たちを彩って、

试读结束：需要全本请在线购买： www.ert

外国や日本の映画界のスターなど昭和十三年の時代の流行を反映した似顔が、木架にとめられて掲げてあり、客を誘おうとしていた。しかし、一枚弐拾銭を投じて、描いてもらおうとする客もなかなか現われなかった。

「どうも不景気だねえ。これじゃ今月も下宿料は稼げないぜ」

一人がやけに強くマッチをすって、バットに火をつけると、隣のが、

「下宿料どころか、バットも吸えねえ。一本くれ」

と、機会を捕えたように一本もらい、

「世間はインフレ景気というのに、おれたちの不景気は解せねえと思っていたが、その理由がわかったんだ。このごろ、カフェーなんかをいちいちのぞいて描いて廻っている奴があるそうだ」

と言うと、

「けしからん、そいつのせいだな。俺たちは場銭さえ払っているのに、そんな商売の邪魔をする奴、つかまえてなぐっちまえ」

「ところが、対手がいけねえ。十六、七の断髪のとてもかわいい少女というからね。その上とてもうまいって話だぜ。昨日さし絵を持って行った子供の雑誌の記者に聞いた話なんだが、君よりうまいかもしれんなんて癪なひやかし方をしていたがね」

「対手が小娘じゃなぐりもできないな」

彼らによって噂された少女は、その時銀座の中心、尾張町の角の大きな時計店の下にたたずんでいた。眼の澄んだ、削げた頬、ちょっとしゃくれた顎にかえって魅力のある顔で、截った髪が無造作に肩にもつれ、古びていたが、黒いジャケツ、紺のスカートがぴったりあって、大きな厚紙の袋を抱いていた。かの女は誰かを待ちあぐんでいるらしく、時々唇をかみしめたりして、いらいらしたふうであったが、ようやく交叉点を横ぎってくる人の渦のなかに、四十を過ごしたよごれた和服の髪も髯も茫々とした男を見いだすと、つっと近づいて行った。

「お父さん、お父さん」

二、三度声をかけられ、そのきたならしい恰好の男は、沈痛にうち沈んだ顔をようやくもたげ、その少女を認めると、はじめて慰められたように、顔色をやわらげた。

「おう、マキか。だいぶ待ったかね」

「ええ、少し……」

「それはおきのどくだったね。なにしろ用がひまどって、ひどく待たせられたよ」

マキは父の顔色から、父の用件がはかばかしくゆかなかったことを、敏感に察することができた。

父、赤城三峰のかつての画家としての名声は、しばらく問うまい。今は世にむくいられず、自らも世をすねて、その日の糧のために、すぐれた腕をすりつぶしている。今日は夕方から、すで

に夏場のための団扇や、扇の下絵をもってそうしたものを引き取ってくれる店にでかけて行った。
「流行おくれとか、なんとか口実つけてね。少ししかとってくれなかった。それもわずかな代金でね、アハハハハ」
三峰は自嘲するように、うつろな笑いをもらして、袖をふって銀貨の音をたててみせた。
「でも久しぶりの収入だ。おまえもおなかがすいただろう。どこかで飯を食おう」
連れだった親子は、おでん屋や小料理屋の並んだ横町へ入って行った。そうした店のなかから、質素な安食堂を選んで、のれんをくぐった。すぐに安い定食を注文する父にマキは少女心にも、なにか悲しいものを感じて、それを無邪気な、晴れやかな調子にかえてしまい、
「お酒はいかが、一本召し上がれよ」
と大きな眼に微笑の色をうかべて、見上げると、
「そうだね。でもこれからおまえは働こうというのに、ちょっと悪い気がするな」
と気がねのふうを、
「あら、そんなこと言って、いやよ。お父さま」
と、マキは自分で女中に、父に代わって、お酒を命ずるのであった。
マキの酌で、久しぶりに重ねる杯に、もはや先刻の沈痛の色も消え、幸福そうであった。しかし、一本を底をたたくようにして、あけて杯をていねいにふせると、父はまたなにごとかを案じる気配だったが、マキをしみじみいたわり眺めながら言いだした。

「実際、おまえが夜ふけにそうしてこの町々を歩いている姿を、うちでじっと想像していると、かわいそうなのと、心配とでたまらないのだ。こんなことなら、なまじっか絵心をそそるようなことを教えこまねばよかったと後悔もしたことだ。余裕さえあれば、ちゃんとした画塾へでも通わせ、もっともっとのばしてやりたいのだが。おまえはなんでもないと言っているが、それで腕がすさむことはわかりきっている。それにおまえの出入りする場所が場所だから、見せたくないことも見せねばならぬ結果になるし、しみじみお父さんの能なしにわれながら愛想がつきるのだ。それに、言いだしたらきかぬ気のおまえだからねえ」

「あら、あら、またお父さんの愚痴が始まった。もうそんな話よしましょうよ」

マキは相変わらず、無邪気に、父の膳の碗をとって給仕してやるのであった。

市電で、白山下の借家へ帰ろうとする父親を送って、屋張町の停留所へ行きかけたマキは、

「ああ、そうそう。清原さんから頼まれたもの、あたしおそくなるし荷厄介だから、お父さん持っててくださらない。例のパンよ」

と思いだしたように言った。

清原審也は帝国大学の医科の学生で赤城の家に間借りしていた。むさくるしい家の四畳半をかりて、自炊生活しているのは、決して豊かな学生生活を送っているのではない証拠であるが、時時、銀座のその有名なパン屋のパンは、質がよくて、安いというのでマキに頼んで買っていた。

それから求めたパンの包みを抱いて電車に乗った父親に別れ、職場としている本通りと並行し

て酒場やカフエーでうずめられている裏通りをすたすたと歩いて行った。「唄わしてよ嬢」と呼ばれた、七、八歳の幼いなりにまっ白く白粉を塗り、ませた安来節やおけさ節から歌謡曲を、客にねだって歌う少女の影は、警察の取締りでこの町から姿を没したけれど、辻占売りの小学生、子供を背負ったハンカチ売りのお内儀、花束売りの少女など、マキと同様、酒場からおでん屋、カフエーと、そこの客を対手の連中は、すでに闇と光のあいだを縫ってうごめいていた。

「今晩は、景気はどう？」

と、マキの姿をいつか見識って声をかけてゆくヴァイオリンを弾いては、五銭、拾銭もらって歩く音楽家の卵らしい青年もあった。もとよりこうした連中は弱い商売だった。彼らの入ろうとするたいていの店には、「物売り、諸芸人出入りお断わり」という張り札がしてあった。それを押して入ってゆくと、女給を抱いていい気持ちに酔っている客から、

「うるさい！」

とどなりつけられたり、入る前、入り口に立っているボーイからつきとばされたりすることが多かった。

もはや半年以上、こうした場所にあらわれるようになって、マキもようやくその辛さに馴れてきた。それにかの女の可憐さは、またたく間に対手の特徴を捕えて描き上げる腕の達者さとで、あちこちの店の女給たちに愛せられた。

「うるさい！」

とどなる客を、

「じゃ、あたし描いてもらっていいでしょう。ねえ？」

と、客に代わって自らを描かせ、客から代金をもらって、マキに与えてくれる女給もいた。愛くるしく、すらとのびたマキの姿に、酔った眼を見すえて、

「かわいい娘だねえ」

と、腕をのばそうとするのに、すくんで身を退かせるマキをかばって、自分も酔いにまぎらし、

「なにすんのさ、このヒヒ野郎」

と伝法な口調で、客をしかるおでん屋の女中もいた。

こうした場所にはたらく女たちの大部分には、生きてゆく苦しさから、さらに幼い身で働きにくるマキの身に、詳しく聞かぬまでも、想像される不幸なものがあるにちがいないことを、わが身同様に思いやる共通の感情があった。その可憐ななかに、弱々しさのない陰影のある容貌のマキは、そのためいっそうこの裏街の人々から愛情を持たれていた。

怜悧なマキは、いつか自分に集まっている人気めいた、裏街の人々の愛情に気づいていたけれど、それに甘えることを自省していた。それにつけ入って、甘えてはならぬと思った。同じ店に毎晩のようには行かなかった。店に入る。マダムがいれば、まずマダムに、それから女給たちにていねいにお辞儀をする。それから、半歳のうちにいつか知るようになった直感で、そうしたも

试读结束：需要全本请在线购买： www.ert

のに興味を持ちそうな客に近づいてゆき、
「似顔いかがでございますか」
と、上品さを失わぬ愛嬌をたたえながら、聞くのが慣しだった。
断わられても、
「次の機会にどうぞ」
と、他の辻占売りや、花束売りのようにしつこくせまらず、淡々として引き上げてゆく。
今日、父と別れてから一時間以上もたったけれど、どうしたことか、ただ二人の客しかなかった。そんなことから、かの女はバー・アラスカのことを思い浮かべていた。
そこへ行けば、たいてい仕事がある。しかも、かの女が行くたびにその客が来てさえいれば必ず描かせてくれる青年がいる。もうその青年の似顔を幾枚描いたことだろうか。細い顎は意志の弱さを示しているが、逆にどこかずうずうしさもありそうなちょっと厚い唇、きめのこまかな頬の線、ちょっと高慢そうな鼻、もはや本人を直接見ないでもさっさと描き上げてしまうことができそうだ。あまりしばしば描かせるので、時には店のマダムや女給たちに気がねしたように、いろいろ向きをかえて描かせている。
「今度はうしろから描いてもらったらどう?」
など、ひやかされると、ひやかされていると知っているくせに、
「そうだね。じゃ後ろから」

などと頼むずうずうしさも持っていてマキを面くらわせることもある。自分を描かせない時は、女給たちを描かせてくれ、弐拾銭というのにいつも五拾銭くれる慣しだった。

マキの姿を扉口に見いだすと、

「さあ、お待ちかねの絵かきさんがお見えになったわ」

と、女給たちは一斉にその青年の顔を見る。十七歳のマキは、別にその青年にどうというのではないがまばゆいような感じがする。心配そうな父の顔や、間借りしている医学生清原の顔が瞬間ちらと浮かぶ。それでなるたけその酒場には寄りつかないようにしていた。

しかし、今夜のようにただ二人しかまだ描かないという気のあせりから、行きさえすれば描かせてもらえるアラスカのことが、強い誘いとなって、浮かんでくる。

――あの人、そんな不良とは思えないけど。――でもやはり、お父さんたちのおっしゃるように、あまりなれなれしい人は用心したほうがいいかもしれない。

いつかおびき寄せられるように、路地の奥に「バー・アラスカ」とネオンの灯の見えるところまで歩いてきたマキは、ひきかえそうとすると、

「もしもし、ちょっとお尋ねしたいんですが」

と、女の声でうしろから呼びとめられた。中年の束髪のきちんとした奥様ふうの人だった。かの女は光に照らしだされた、もはや紙ばさみからいちいちとりだすのがめんどうで、そのまま携えている見本用の似顔絵で、マキの仕事を知ったらしく、

「この辺にアラスカという酒場知りません？」
「アラスカ？　アラスカはこの奥の右手に、青いネオンが見えましょう。あの家です」
マキは自分が行こうかと、迷っていた場所のことを、しかもそうした場所にあまり関係もなさそうな、地味なきちんとした奥様ふうの婦人から、興奮した口調で聞かれたことを、変に思いながら、手をあげて示した。そしてすたすたと行こうとすると、その婦人は、
「ちょっと」
と、また呼びとめ、
「すみませんが、ちょっとあなたにお頼みしたいのですが」
と、低い声で言った。
「……？」
マキはなにごとかと立ち止まると、
「あのアラスカという酒場に、大月と申す者が行っていないか、ちょっと聞いていただけませんか、もしいたなら、家の者が来ているから出てくるように言ってちょうだい――これ少ないけどお頼みした代わり」
すでに用意していたように紙に包んだものを渡そうとするのをマキは、
「そんなものは――」
と、手を引いて、うけとらず、ことばはていねいなようだが、なにか人を見下げたような調子に

ちょっと不愉快になったけれど、大月という姓は、例の絵をよく描かせてくれる青年のことだなと、彼に女給たちの呼びかけることばから、ぼんやり覚えこんだその名に、この女はあの青年の母親かもしれないと、ちらと見る顔の輪郭は、マキが幾度か描いた青年の輪郭ときわめて似たものがあるので、いよいよちがいないと思いこんだ。

この裏街を歩く花束売りの少女や、辻占売りの少年たちは、またよく客と女給たちの約束の秘密な言い伝えや、手紙をそっと渡す使者の役を、いくばくかの金をもらってひきうけることに慣らされていた。

しかし、マキはそうしたことを引き受けることは、自分の誇りをきずつけることとさとって、絶対にひきうけなかった。だが、今の場合、婦人の自分を見下したような高慢さは気にさわったが、母親があの青年を尋ねてはきたけれど、さすがに華やかな場所に進んで入ることを気がねしているのだと想像することができた。またそう思っているうち、この婦人はたしかこの路地の奥から出てきたようだった。するとアラスカの前まで行って、入りかねて引き返してきて、誰かに頼もうと思って、たまたま自分に気づいて頼んでいるように考えられた。

「あたし尋ねてきてあげますわ」

マキは気軽にそう言うと、もうバタバタ走りだしてアラスカのなかに入って行った。扉を開くと同時に、奥のテーブルに例の青年が、バーのマダムを前において、かなり酔っているさまが眼についた。

先方もマキの姿をみとめると、
「やあ、しばらく、このごろなかなか姿をあらわさないね」
とグラスをあけながら、大声で叫んだ。
マキは何と言っていいか、ちょっとためらったが、
「大月さんて方いらっしゃらないか、外で女の方が聞いてくれとのことです」
と、視線をその青年にむけながら、一気に言った。
「女が僕を呼んでる?——」
女ということでわーっという女給たちの歓声に包まれながら、その青年は首をかしげてふらふらと立ち上がった。

そして表口にでた青年大月は、薄暗がりにたたずんでいる女の影を、いぶかしむように、酔った瞳をこらしてみつめると、
「なあんだ、お母さんか」
と、がっかりしたように言ったが、さすがに酔態をみせたのを、苦笑して、しっかり立とうと努力する心持ちも湧いた。
「もうお帰り!」
母親は、低いがたしなめるようなきびしさを語気にふくませて、ただそれだけ言った。

「しかし、よく発見したもんだなあ」

大月は、母親などなめ切ったように、親の子供に対する甘さを充分のみこんだ調子だった。

大月は名前を銑三と言ったが、彼の父親は古手の役人上がりで、今は民間の会社の顧問などして、それからの収入と恩給とで、気楽な余生を送っていた。役人上がりの頑固さは銑三にもきびしいしつけ方をしたけれども、それがきびしければきびしいほど、その束縛からするする抜けだしてしまった。

下級官吏からなり上がった、辛苦にみちみちた今までのコースを省みて、せめて一人息子の銑三はのびのび育てたいと、そういう気持ちから学校も富豪の子弟の集まるK大学をえらび、自分が泳いできた、つらかった官界より、大きな会社にでもつとめさせたい念願であった。

のびのび育てたいという気持ちはあっても、やはり自分の一生にこびりついた昔気質は、払いおとすことができず、もうこの春卒業というのに、中学生でも眺めるように、父母の眼は銑三にそそがれていた。いっそ何も見えない場所に閉じこめておくならとにかく、広々として外は自由な野原のまん中に、狭い木柵をこしらえて、そのなかに銑三を、れておくようなやり方だった。

銑三は学校で、官庁の課長級の月給に等しい学資を、毎月送ってもらっている地方の富豪の子弟や、幾つもの会社の重役の息子たちと交わって、彼らと同様なはでな学生生活に追いつく努力をしてきた。

そうした生活からえたものは、人見知りをしない、一種のずうずうしさと、小りこうな世のた

试读结束：需要全本请在线购买： www.ert